

福岡市埋蔵文化財調査報告書1219集

IJIRI-B SITE

THE REPORT OF THE 38th EXACAVATIONS
OF THE REMAINS OF IJIRI-B SITE
IN FUKUOKA, JAPAN

井尻B遺跡24

—第38次調査報告—



March 2014
FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION

2014
福岡市教育委員会



序

福岡市は、原始より大陸文化流入の門戸として栄え、市内に多くの埋蔵文化財が残っています。このため、先人たちの足跡である埋蔵文化財の保護に努めるとともに、まちづくりの目標のひとつに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。

今回報告いたしますのは、本市南部に立地する井尻B遺跡の発掘調査成果です。

今後、本書および調査資料が学術研究だけにとどまらず、市民各位の埋蔵文化財に対する理解が深まるることを願うものです。

最後になりましたが、地権者様をはじめとする関係各位には、発掘調査から報告書の刊行に至る間、ご理解とご協力を賜りました。ここに深く感謝申し上げます。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 **酒井龍彦**

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
1. 発掘調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境	2
1. 遺跡の立地	2
2. 遺跡の歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の記録	6
1. 試掘調査の概要	6
2. 発掘調査の概要	6
3. 遺構	8
4. 遺物	9
第Ⅳ章 結語	10

挿図目次

Fig. 1 調査位置図 (1/200,000)	1	Fig. 7 遺構配置図 (1/80)	7
Fig. 2 調査地周辺道路分布図 (1/25,000)	3	Fig. 8 調査区南壁土層図 (1/40)	8
Fig. 3 調査地周辺地形図 (1/4,000)	4	Fig. 9 土壌SK0-4 遺構実測図 (1/60)	8
Fig. 4 調査地周辺状況図 (1/1,000)	5	Fig. 10 出土遺物実測図 (1/3)	9
Fig. 5 試掘トレーン位置図	6	Fig. 11 出土遺物(O0001)	9
Fig. 6 調査区南壁土層図 (1/40)	6		

図版目次

PL.1 調査地周辺航空写真 (1948年 昭和23年)	PL.5 (1)第2調査区全景 (南から)
PL.2 調査地周辺航空写真 (2009年 平成21年)	(2)第2調査区遺構全景 (北から)
PL.3 (1)調査前状況 (南から)	PL.6 (1)第2調査区土壤SK03 (南から)
(2)第1調査区表土除去状況 (北から)	(2)第2調査区土壤SK04 (南から)
PL.4 (1)第1調査区遺構全景 (北から)	PL.7 (1)第2調査区遺物包含層残存状況 (東から)
(2)第1調査区土壤SK01 (西から)	(2)調査地現況 (南北から)

凡例

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡市南区井尻5丁目地内の共同住宅建設予定地において、2012年度(平成24年度)に実施した井尻B道路の第3次発掘調査報告書である。
2. 本書における調査の順番は次のとおりである。
3. 実測図に付した座標値は平面直角座標形第1回座標系(世界測地系)で、方位(磁北)は真北に対して6°18' 西偏する。
4. 本書では遺構ごとに一連の番号を付け、番号の前にSK (土壌)などの遺構の性格を示す分類記号を付した。
5. 本書による遺構・遺物の実測および遺構・遺物の写真撮影は准本正志が担当した。
6. 本書による遺構・遺物は准本正志が担当した。
7. 本書の実測図に係る資料、記載欄のすべては、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されている。

調査次数	調査番号	遺構番号	調査地	面積	調査期間
38次	1215	IGB-38	南区井尻5丁目	59.1m ²	2012.8.2~2012.8.23

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至る経緯

福岡市埋蔵文化財審査課は、福岡市南区井尻5丁目160番2における共同住宅建設工事に先立つ埋蔵文化財の有無についての照会を平成24年5月21日付で受領した。(調査番号24-2-171)

これを受けて同課事前審査係は、当該地が埋蔵文化財保有地の「井尻B遺跡」内に位置するとともに試掘調査が必要である旨を回答し、平成24年(2012年)6月4日に試掘調査(試掘番号24-59)を実施した。試掘調査の結果、地表-25cm~-40cmの鳥居ローム層上面で遺構の残存を確認すると共に少量の遺物を採取した。

同課は試掘結果を受け、計画される開発事業が実施された場合には遺跡に影響が及ぶものと判断し、事業者と文化財の取り扱いについて協議を行った。その結果、遺跡への影響を回避することが困難なことから、掘削工事範囲については記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成24年7月18日付で地権者を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年8月2日から発掘調査を、平成25年度に資料整理および報告書の作成を行うことになった。

2. 調査の組織

調査主 体 福岡市教育委員会

平成24年度 (調査) 平成25年度 (整理)

教育長	酒井龍彦	酒井龍彦
文化財部長	藤尾浩	西島裕二
埋蔵文化財調査課長	宮井善朗	宮井善朗
調査・整理担当 (埋蔵文化財調査課)	瀧本正志	瀧本正志
庶務・經理担当 (埋蔵文化財調査課)	古賀とも子	横田忍
事前審査担当 (埋蔵文化財調査課)	森本幹彦	

※なお、文化財部は、組織改変に伴い平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局へ移管した。



Fig.1 調査地位置図 (1/200,000) (国土地理院発行20万の地図 (福岡) を使用)

第II章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と立地

井尻B遺跡は、背振山地から派生して島状に高低を繰り返し春日・那珂・比恵と名称を変えながら北方へ延びる春日丘陵と那珂丘陵の中間に位置する独立丘陵に所在する。これらの丘陵は須久火山灰の堆積により形成された洪積台地で、西側を那珂川、東側を諸岡川が北流する。後世の開削により地形の大幅な変更が見られるもの、かろうじて当初の丘陵地形を残す。

調査地は丘陵の丘陵尾根、南側緩斜面に位置するものの、現況は平坦に造成され標高14.5mを測る宅地である。

2. 遺跡の歴史的環境

井尻B遺跡群が立地する那珂川の右岸に沿って細長く延びる台地上には数多くの遺構が存在する。台地の南側は春日市と接しているが、その春日市内には須久水田遺跡や須久坂本遺跡等の青銅器製造関連の遺構・遺物が出土する遺跡が存在しており、江戸時代から鉄型が出土することが知られていた。ここ井尻周辺においても江戸時代に青銅器の鉄型が出土しており、奴国の大工房のひとつとして注目されてきた。福岡市教育委員会の発掘調査においても鉄型だけではなく、鉄型に使用された石英長石斑岩の破片が多く出土するため、多くの青銅器が生産されていた可能性が高いと考えられている。

古代の遺構についても青銅器同様古くから瓦が出土することは知られており、大正13年には前述した鉄道の切り通しに露出した瓦包含層についての中山平次郎の報告がある。福岡市の発掘調査では、1992年に行われた第3次調査で南北方向の溝が検出され多くの瓦が出土した。これら当時の調査から一辺が100mの範囲が遺構の分布予想範囲として設定されている。

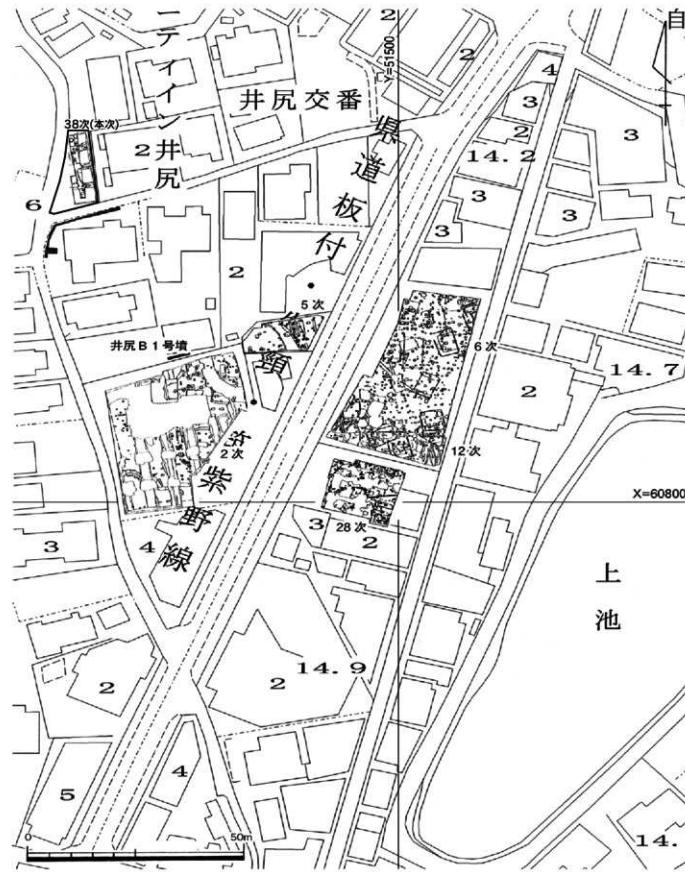
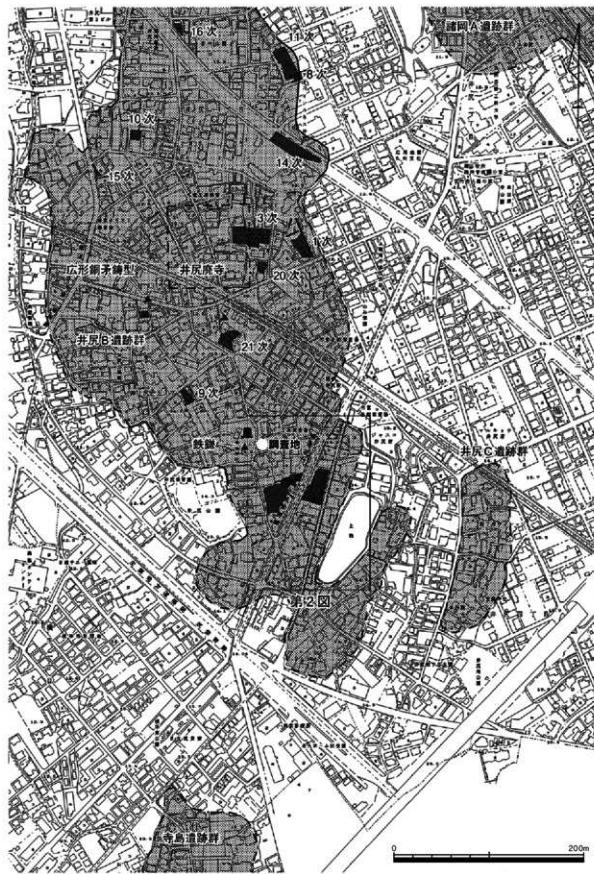
井尻B遺跡のこれまでの発掘調査の概要を述べると時期は旧石器から古代の遺構が確認されている。旧石器は主に台地の南端部（西鉄大牟田線より前側）で確認されている。北側では後世の遺構から石器が出土するものの原位置を留めるものは知られていない。弥生時代では台地の北西端で西白式土器や板付日式土器の破片が出土しているが、確定な遺構としては中期前葉の城ノ越式期の貯蔵穴が最も古い遺構である。その後、中期中頃の須玖I式期までは遺構の数は少ないものの後世の遺構から当時期の遺物が多く出土するため遺構の多くが削平されたものと思われる。後期後半になると遺構は台地全体で検出されるようになり、弥生時代終末までに多くの堅穴式住居が建てられる。この時期には大規模な集落が形成されるだけではなく、青銅器やガラス製品の生産など工房的な様相を示すようになる。古墳時代になると堅穴式住居などの生活遺構は造られなくなる。

7世紀末から8世紀初頭には台地中央部で寺院・官衙の建物が建設される。その時期の遺構は台地北端の22次調査や南端に近い6次調査でも確認されており、台地全体に広がることが判明してきた。この時期の瓦が出土する遺跡は那珂川左岸の三宅庵寺があり、右岸では那珂遺跡、高畠遺跡など数多く分布している。

（※本項は「井尻B道路11」福岡市埋蔵文化財調査報告書第736集2003から転載）



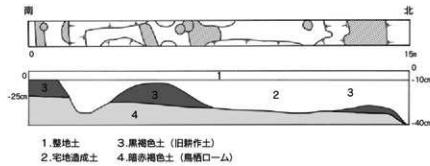
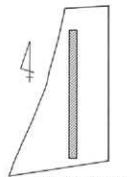
Fig.2 調査地周辺道路分布図 (1/25,000)



第三章 調査の記録

1. 試掘調査の概要

試掘調査は、以前に建設されていた共同住宅による遺跡への影響と残存状況の把握を目的として、平成24年6月4日、調査地中央部に全長15m・幅0.6mのトレンチを南北方向に一字文字状に設定して行った。試掘トレンチによる遺跡確認範囲が占める割合は予定建物範囲の11.3%、敷地の5%である。試掘調査ではFig.5に示すように、整地土の下は以前の宅地造成土や基礎搅乱土が全域を覆う。地表下10~30cmで旧耕作土の黒褐色土、地山の鳥栖ローム層である暗赤褐色土層は地表下25~40cmで認められた。遺物はほとんど認められず、遺構の土壤・溝・小穴は鳥栖ローム層上面でしか検出できなかった。



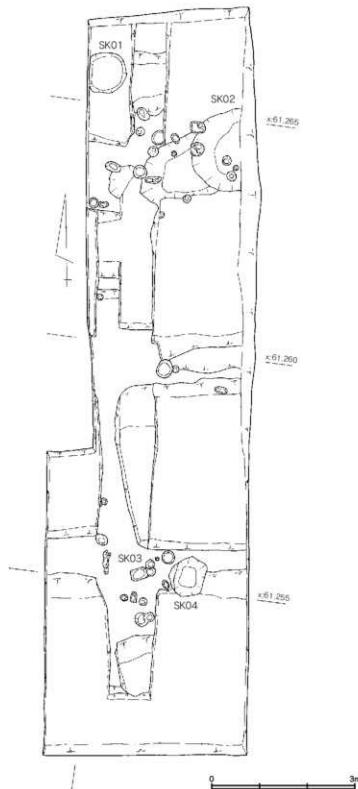
2. 調査の概要

調査は、発掘調査によって生じる堆土置場確保の問題から調査区を南北に二分して、北側を第1調査区、南側を第2調査区として実施した。2012年8月2日のバックフオーによる表土除去を手始めに調査が開始された。試掘調査結果では遺構の残り具合が良好のように解されるが、表土および造成土を除去すると、そこには以前に所在した建物の基礎工事や解体時の掘削によるユンボの爪痕も生々しい状況が調査区全域に広がっており、この状況は第2調査区でも同様であった。試掘調査の結果は、先の工事で影響を受けた度合いが少なかった極めて狭小な範囲とトレンチとが偶然重なった所産によるものであった。

遺構は調査地中央部に南北方向に走行し、周囲の掘削によって平坦な畦状で残る鳥栖ローム層上面（黄色灰色粘質土）で土壤、小穴などを検出したが、残存する遺構面はきわめて狭い範囲であった。鳥栖ローム層の直上には、いわゆる「黒ボコ」と称される北部九州の洪積台地によく見られる黒色土層、さらにその直上に旧耕作土の黒褐色土層が位置する。

遺物の出土量は極めて少なく、検出した遺構の年代確定に支障をきたすほどであった。

発掘調査は、8月22日に完了した。



3. 遺構

(1) 土 壤 (SK)

土壌は大小合わせて4基を検出したが、内1基は井戸の可能性が高い。

SK01 (Fig. 7 PL.4)

調査区北西側に位置し、遺構の西端部が調査区外に広がる。円形の平面形を呈し、壌底も同様である。径0.9m、深さ0.35mを測る。底面は平坦で、壁は直に立ち上がる。遺物は出土していない。

SK02 (Fig. 7 PL.4)

調査区北東部、SK01の南東3mに位置し、東半部が調査区外に広がる。円形もしくは梢円形の平面形を呈し、壌底も同様である。径1.7m、深さ0.6mを測る。底面は平坦で、壁は緩やかな弧を描くように立ち上がる。遺物は出土していない。

SK03 (Fig. 7 PL.5・6)

調査区南半部中央、土壌SK04の西側に位置する。卵丸長方形の平面形を呈し、壌底は梢円形に近い。長辺0.4m、短辺0.25m、深さ0.2mを測る。底面は平坦で、壁は直立する。遺物は出土していない。

SK04 (Fig. 7・9 PL.5・6)

調査区南半部中央、土壌SK03の東1mに位置する。卵丸長方形の平面形を呈し、壌底も同様である。長辺0.8m、短辺0.65m、深さ1.12mを測る。底面は平坦で、壁はやや外反しながら直線的に立ち上がる。土壌四隅の壁面には半円柱状の凹みが看取され、丸太柱が位置していた可能性が高いことから、井戸の可能性がある。遺物は出土していない。

(2) 柱穴・小穴 (SP)

柱穴・小穴は、調査区に僅かに残る鳥居ローム面において約30個を検出した。掘立柱建物の柱穴および柱痕跡である可能性が極めて高く、各穴を起点にして推定される建物の柱位置を精査したが、建物としてまとめるには至らなかった。穴の覆土の大半は黒色土である。

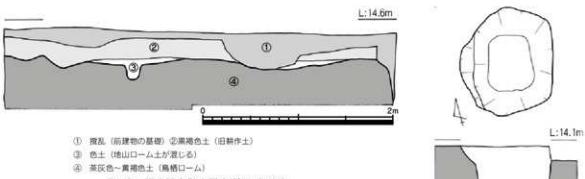


Fig.8 調査区南壁土壌実測図 (1/60)

4. 遺物

遺物は30数点の土器片が出土し、いずれも小片のために器種や製作年代が判明できる物は少ない。このような中で、弥生土器甕、土師器高杯・甕が出土している。

(1) 弥生土器 (Fig.10・11)

00001は甕の口縁部の破片で、遺構検出を行った鳥居ローム層直上の黒色土層（遺物包含層）から出土した。口縁は直立し、端部は平坦で内と外の両方に引き出され、断面形がT字状を呈する。胎土は橙灰色を呈し、1mmほどの砂粒が多く含む。酸化炎焼成により硬質である。弥生時代中期～後期に比定されよう。



Fig.10 出土遺物実測図 (1/3)



Fig.11 出土遺物 (00001)

第IV章 結語

本次調査では、柱穴や小穴のほかに井戸跡と考えられるものも含む土壙4基を検出し、コンテナ1箱ほど
の弥生土器や古墳時代の土師器片を得ることができた。

調査対象地の大半が既存建物の基礎工事によって削平を受けて良好な遺構の発見には至らず、遺物出土量
も極めて少なかったものの、当地周辺における歴史的様相の一端を知る資料を取得することができたのは
貴重であった。

検出された遺構の数は少なかったが、僅かに残る洪積層と直上層（黒色土）における遺構密度は高く、
同地周辺が宅地開発による地形の変更を受けていても遺跡としての価値が下がるものではない。これらの
遺構は、弥生時代中期後半から古墳時代に至る時間内に位置することが出土した遺物から知ることができる。
また、調査地周辺地域には集落が存在していたことを示唆するものと理解されるが、広がりや様相に
ついては今後の調査結果を待たなければならぬ。

また、遺構面である鳥栖ロームに代表される洪積層面や直上層である黒色土層は、本調査地では壊滅的
状況であったが、周辺地域においては良好な状態で残存している可能性が高いことが判明したことは数少
ない成果のひとつと言える。したがって、今後の同地周辺における掘削を伴う開発計画については、対象
地が再開発地であったとしても遺構の遺存が考えられることから、慎重な取り扱いが求められよう。

図 版

PLATES



(露置での調査風景)



調査地周辺航空写真（1948年 昭和23年）

国土地理院所蔵



調査地周辺航空写真（2009年 平成21年）

国土地理院所蔵



(1)調査前状況（南から）



(2)第1調査区表土除去状況（北から）



(1)第1調査区遺構全景（北から）



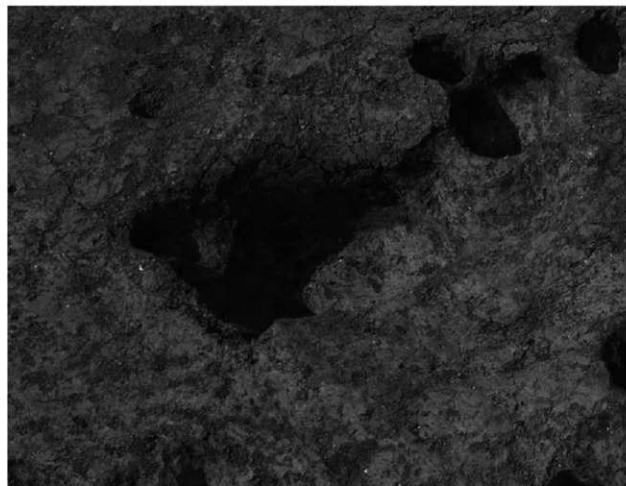
(2)第1調査区土壤 SK01（西から）



(1)第2調査区遺構全景（南から）



(2)第2調査区遺構全景（北から）



(1)第2調査区土壤SK03（南から）



(2)第2調査区土壤SK04（南から）



(1)第2調査区遺物包含層残存状況（東から）



(2)調査地現況（南西から）

報告書抄録

書名ふりがな	いじりB.いせき	24	
書 名	井尻B遺跡24		
副 書 名	第38次調査報告		
巻 次	24		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	1219		
編 者 名	瀧本正志		
著 著 名	瀧本正志		
編 集 機 間	福岡市埋蔵文化財調査課		
発 行 機 間	福岡市教育委員会		
機関所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号	Tel. 092-711-4667	
発行年月日	2014年3月24日		
遺跡名 ふりがな	いじりB.いせき	北緯 (世界列地系)	333303
遺 跡 名	井尻B遺跡(第38次調査)	東経 (世界列地系)	1302632
所在地 ふりがな	ふくおかまち ふくおかし みなみく いじり	市町村コード	40130
遺跡所在地	福岡県福岡市南区井尻五丁目160番12	遺跡番号	0090
調査原因	共同住宅建設	調査期間	2012.08.02~2012.08.23
種 別	集 落	調査面積	59.1m ²
主な時代	弥生時代～古墳時代	主な遺構	土壙・柱穴・小穴
主な遺物	弥生土器・土師器		
特記事項	以前に所在した共同住宅建設に伴う大規模な削平により、遺跡内の当該地は壤浜的なダメージを受けている。		

井尻B遺跡24

— 第38次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1219集

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

Tel092(711)4667

発行日 平成26年3月24日

印 刷 有限会社 宏栄社印刷

福岡市南区清水1-10-5

